「野性の残像－過去をめぐるイデオロギーの磁場」

小川英文　030425

はじめに

問題発見の契機：わたしの発掘は誰のためのものなのか？

◎　わたしが日本で学んだ考古学の方法はフィリピンでは使えなかった：アカデミック世界の技術的問題：倫理観

◎　考古学が国民国家の神話作りに寄与しているという問題：現在の日本とフィリピンとの政治経済的関係が、そのまま過去に反映されるという問題：日本考古学にとっては「日本の南方的要素」としてのみ存在する先史フィリピン

◎　ポストコロニアル批判の文脈で批判可能→考古学が文化を議論する非政治的な学問分野であるという認識を揺るがす→それによってフィリピンでも可能な考古学の方法を模索する

「野性の残像」解題

１．現在が過去をつくりあげるという問題

「捏造」が提起する表象の問題：時代が作り上げた旧石器の捏造→過去の想像やイメージの形成のあり方

この問題を２つの学問的枠組みのなかで考察する

◎　ナショナリズム：国民国家の諸制度のなかで、いやおうなく獲得している美意識

◎　狩猟採集社会イメージ：近代の制度のなかで、いやおうなく獲得している観念→「他者」、「時間」

目的：考古学の学問的枠組み自体を見直し、新たな方向性を模索する

２．考古学とナショナリズム

ナショナリズム：国民統合のイデオロギー→考古学との関連：近代における神話創造→歴史物語のつくり方→

◎　「栄光の過去」：「飛び石」と「接ぎ木」で自尊心をくすぐる物語を創造し、「・・人」としての自覚を促す→伝統、独自性、固有性、純粋性の強調→国家の外部を意識した歴史物語の創生→近代日本の決定的な節目（外国との軋轢）にフィヒテの翻訳

◎　文明：古代から現在まで、人類の歴史の道筋として受け入れてきた、自然な概念→実は近代になって創られた概念国内的には「栄光の伝統」、国外的には植民地支配の正当化の根拠→文明の「脱自然化」：文明という時間尺度→政治経済的に「遅れた他者」を自分の過去に布置することを、いともたやすく実践しているわたしたち

３．狩猟採集社会イメージの変貌が提起する問題

カラハリ論争：狩猟採集社会と外部との過去における交流の実態をめぐる論争→閉鎖系（石器時代の生き残り、自立性＝伝統主義者）か、開放系（交流、相互依存性＝修正主義者）か？：狩猟採集社会を石器時代から変化のない社会というイメージに固定→考古学は長年、カラハリモデルをもとに先史狩猟採集社会を復元してきた→「自分より遅れた者は純粋だ」というイメージ

◎　東南アジアの「カラハリ論争」：ヘッドランドのアグタ研究→少なくとも 3000 年前には農耕社会と交流

◎　民族誌的現在（ethnographic present）という時間観念：狩猟採集社会の自立性、純粋性を確保するための前提

◎　依然として、一方的な狩猟採集社会の表象が学問の名のもとに行なわれ続けている→他者認識の脱近代的転換

◎　民族考古学の可能性：民族誌的現在を排除しながら、過去からの変化を考慮→伝統主義／修正主義論争の乗り越え

４．野性の残像（結論）

過去について語るとき、わたしたちが囚われている「観念の檻」を、国民国家のイデオロギー（ナショナリズム）と他者認識の時間尺度について考察した→野性の二面性

◎　他者認識の類型（パターン）化：自己と他者の距離を測る時間的指標→とくに狩猟採集社会は最も野性に近い、遠い他者として、今日まで表象され続けている。

◎　しかし同時に、野性は「あこがれ」の対象でもある：純粋で、自然に一体化した祖先をもつという美意識→ナショナリズムが仮構する「暗黙の前提」

主張：日本の考古学は未だ脱構築すら経験していないのが現状である。しかし、考古学がこれまで前提としてきた枠組みは、近代に作られてきた以上、すでにほころびを見せている。新たな考古学は、まずフィールドの経験をとおして、これまでの枠組みの洗い直しと問題発見を実践すること、そしてフィールドでの対話によって拓かれるものと考える。